茨城大学教育実践研究 37(2018),233-241

保健室における養護教諭の効果的なタッチングに関する研究

平 田 桃 花 *・斉 藤 ふくみ **

(2018 年 10 月 24 日受理)

A Study of Effective Tatting of *Yogo* Teachers in Health Room

Momoka HIRATA and Fukumi SAITO

キーワード:タッチング,保健室, 養護教諭

本研究は,養護教諭養成課程の学生を対象に幼少期の親からのスキンシップの経験の実態,小学校・中学校・高校での養護教諭によるタッチングの経験の実態を明らかにし, 学校現場で活用できる効果的なタッチング方法を研究することを目的とする。調査対象は,I 大学養護教諭養成課程の学生 71 名。タッチングに関する演習を実施し,演習前後で質問紙調査を行った。演習は 2 人 1 組になり,養護教諭役と子ども役に分かれて 3 種類のタッチングを行った(毛布を使用したタッチング,立ち位置に着目したタッチング,立ち位置と声掛けに着目したタッチング)。研究によって, 声掛けや目線,立ち位置に気を付けて行うタッチングは,児童生徒に安心感を与え,信頼関係を高めるとともに,体を通した心への支援にも繋がっていることが捉えられた。これらのことから,養護教諭自身がタッチングの大切さを理解し,児童生徒が心から安心できるタッチングを実践していく必要性が示唆された。

はじめに

近年, 児童生徒を取り巻く社会環境の変化に伴い, 児童生徒が抱える心身の健康課題は複雑化・多様化している。学校においても,心身の健康課題を抱えた児童生徒が身体症状を訴えて保健室へ来室している。養護教諭は,常に変化し続ける児童生徒の実態を踏まえ,教育活動や養護活動を展開していく必要がある。「養護教諭は, 児童生徒の養護をつかさどる。」(学校教育法　第 37 条第 12 項) ことを職務とし, 学校内で唯一, 医学的・看護学的知識と技能を有した専門職である。そのため, 養護教諭は, 児童生徒の心身の健康状態を観察し, 健康相談活動や救急処置において対応する際は, 児童生徒に触れる機会が多く, 日常的にタッチングを行っている。澤村ら[1] によると 9 割以上の養護教諭が児童生徒に対応する際にタッチングをしていたと報告している。養護教諭は,より効果的な

*日立市立中町小学校　　**茨城大学教育学部

タッチングをするために意識してタッチングをすることが重要であると捉える。

これまでスキンシップ・タッチに関する研究は多く,澤村ら[1)]は心身の不調を訴えて保健室に来室した児童生徒に対し,養護教諭はタッチングを通して心理的に安心感を与え,心身の苦痛を緩和させるとともに,コミュニケーションを促進させ,ひいては信頼関係を築いていることが推測されると述べている。また,藤野[2)]は,末期がんの患者へのタッチングで患者の痛みが和らいだと報告しており，タッチングは心理的に大きく影響すると考えられる。

タッチングは幼少期のスキンシップにも影響を与えている。山口ら[3)]は,幼少期から家庭の中で行われているスキンシップは，児童生徒の心身の発達に大きな影響を与えると述べている。幼少期の親からのスキンシップの経験の有無により，養護教諭の職務の一つである健康相談活動や救急処置の際のタッチングの効果に影響を与えるのではないかと考える。そこで本研究は，これから養護教諭を目指す養護教諭養成課程の学生を対象に幼少期の親からのスキンシップの経験の実態,小学校・中学校・高校での養護教諭によるスキンシップやタッチングの経験の実態を明らかにし，学校現場で活用できる効果的なタッチング方法を研究することを目的とする。

研究方法

1.対象及び調査期間

Ｉ大学教育学部養護教諭養成課程の女子学生 71 名を対象とし,71 名(100.0%)の有効回答数を得られた。学年別では,1 年生 32 名(45.0%),2 年生 34 名(47.8%),3 年生 3 名(4.2%),4 年生 1 名(1.4%),大学院生 1 名(1.4%)であった。調査期間 2017 年 10 月 24 日(火) 2 限及び 10 月 30 日(月) 3 限である。

2.研究内容

養護教諭養成課程の学生 71 名を対象に，タッチングに関する演習及び演習の前後で質問紙調査を実施した。演習は 2 人 1 組になり,養護教諭役と子ども役に分かれて 3 種類のタッチングに関する演習を実施した。内容としては,毛布を使用したタッチング(子ども役が自分で毛布をかける,養護教諭役に毛布をかけられる,養護教諭役に毛布をかけられたあと毛布の上からさすられる),立ち位置に着目したタッチング(養護教諭に背後からタッチングされる,養護教諭に前からタッチングをされる),立ち位置と声掛けに着目したタッチング(養護教諭に声掛けをされながら背後からタッチングされる,養護教諭に声掛けをされながら前からタッチングをされる)の 3 つである。また,演習を実施した感想について質問紙調査も実施し分析を行った。それに加え,両親からのスキンシップの度合い,スキンシップの満足度,校種別の養護教諭からのタッチングの有無,タッチングを受けたときの声掛けの有無,タッチングを受けた時の感想,タッチングについての考えの質問項目を設けた。回答方式は選択と自由記述の混合である。ここでいう「スキンシップ」は浜崎ら[4)]の研究を参考に,「身体が直接触れ合う身体的接触行動,または身体が直接触れ合っていなくても,親から子どもにはたらきかけたり,子どもと一緒に何かをしたりすることで両者の関係が繋がっている」と子どもに実感させることのできる心的接触行動と定義する。ここでいう「タッチング」は大沼ら[5)]の研究を参考に，養護教諭の手によって，カウンセリングの技法を駆使した言葉掛けをしながら，心身の健康観察および対応の過程においてバイタルサインをとる，痛みや苦痛を緩和・観察するために触って診る，さすって触る等の体への関わりのことと定義する。

3.倫理的配慮

調査の前に研究目的を伝え,調査は無記名で行い個人は特定されないこと,研究以外の目的では使用しないことを説明した。

結果

1)親からのスキンシップの実態からみえること

幼少期に保護者からどれくらいスキンシップを受けたか質問すると就学前と小学校低学年では約 9 割がよく触れられたと回答していたが,年齢が上がるにつれてスキンシップを受ける機会が減っていた(図 1)。一方で保護者からのスキンシップの満足度は,どの年代においても満足していると回答する者が 7 割であった(図 2)。

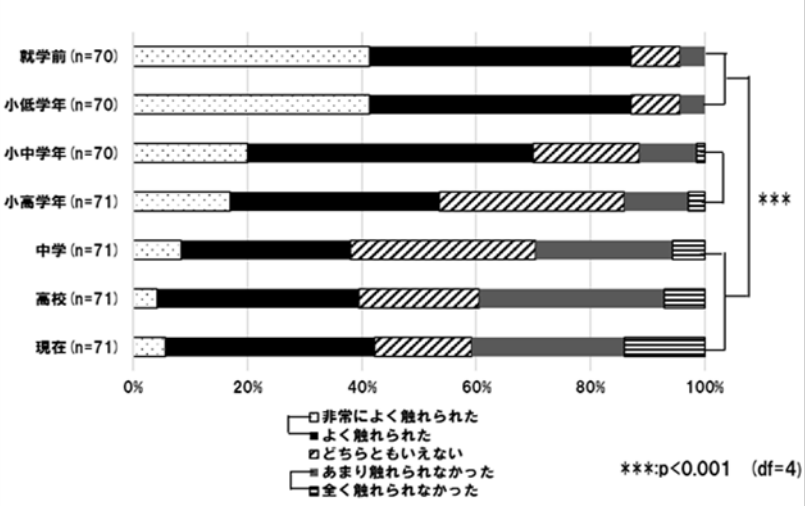

図1 保護者からのスキンシップの度合い（年代別）

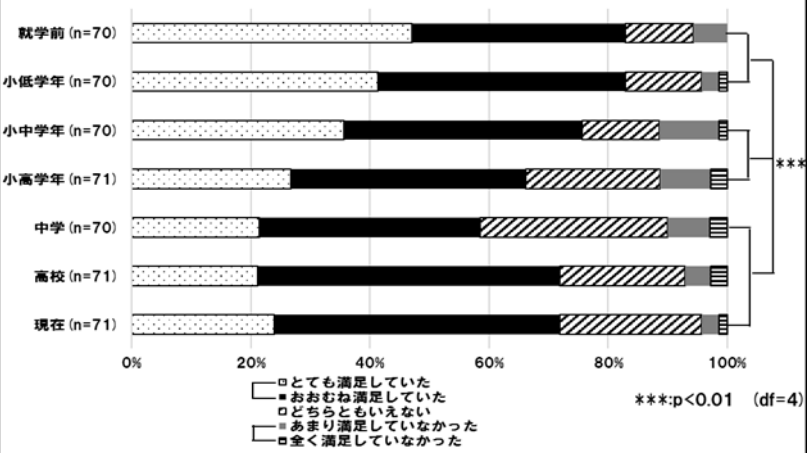

図2 保護者からのスキンシップの満足度（年代別）

2)養護教諭からのタッチングの実態からみえること

養護教諭からのタッチングについては,年齢が上がるにつれてタッチングを受ける機会が減っており,タッチングを受けた場面については「内科的要因」「外科的要因」「健康相談活動」の３つに分類したところ,どの校種においても「内科的要因」が最も多かった(表 1)。

また,タッチングを受けたことがあると回答した人すべてがタッチングとともに声掛けされたと回答していたことから,養護教諭がタッチングをする際には必ず声掛けを一緒にしていることが明らかとなった。声掛けの内容は,「共感的タッチ」「教育的タッチ」「道具的タッチ」「処置的タッチ」に分類 2)したところ,どの校種においても「共感的タッチ」をされたと回答する人が多かった(表 2)。

タッチングをされたときの気持ちについては,どの校種においても「安心できた」が最も多く,次いで「ほっとした」の回答が多かった。

表１ 小学生の時,どのような場面で養護教諭からタッチングを受けたか

カテゴリー	サブカテゴリー	データ
養護教諭によるタッチングの面(21)	内科的要因(12)	血圧を測られたとき(1)
		おなかが痛いと伝えると手をさすってくれた(1)
		小学２年生の時腹痛で保健室に行った時におなかのどこが痛いかきかれて触診された(1)
		熱っぽいとき, 吐き気がするとき, 腹痛があったときなどにさする, なでる等(1)
		体がだるく, 保健室に行った時に熱があるのかを見るためにおでこをさわってもらったことがある(1)
		体がだるいと言った時におでこを触れられた(1)
		熱が出たとき(2)
		お腹が痛かった時お腹をさすられた(1)
		手術を自己血で受けるために採血し, 体調が悪くなってしまったので保健室に行ったとき(1)
		小学校６年生の冬休み前, 嘔吐の症状を訴えた私に対して(1)
		ストレスからくる頭痛や胃痛で保健室に行ったとき(1)
	外科的要因(7)	応急処置のとき(3)
		足を痛めたとき触ってくれた(1)
		骨折の疑いの部位を固定の処置後にさすってもらった(1)
		転んだとき(1)
		しもやけで足がかゆくて我慢できなかった時に, クリームをぬりながらマッサージしてくれたとき(1)
	健康相談活動(2)	中学受験をするかしないかで両親とすれちがいが起きていたときに心の面で支えてくれた(1)

		4年生の時, 走ってきた男の子とぶつかり, 口の中がぱっくりと切れてしまって不安で泣いてしまった時に不安を和らげてくれた(1)

表2 小学生の時,養護教諭から声掛けをされた内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
養護教諭による声掛けの内容(10)	共感的タッチ(5)	大丈夫(4)
		辛いね, 苦しいね等感情を代弁したものが多かった(1)
	教育的タッチ(2)	（頑張って練習していたピアノの発表会前の指の骨折だったので, かなり落ち込んでいた背景があり）頑張って練習していたのに残念だったけどまた次があるよ(1)
		汗かくとむれるよ。よく洗って清潔にね。など, しもやけに対する原因処置方法など(1)
	道具的タッチ(3)	どうした？なんかあった？大丈夫？(1)
		ケガをした時の状況, 今の痛みなどを尋ねられた(1)
		朝ごはんは何を食べたか。いつから気持ちが悪いか。このあとの授業には出られるかどうか(1)

3)演習からみたタッチングの効果

演習 1 で毛布を使った感想をみてみると,子ども役が自分で毛布をかけた場合は「あたたかい」「ほっとかれたような気持になる」の順に多かった。養護教諭役の感想を見てみると「あたたかいだろうなと思った」「なんとも思わない」の順に多かった。また,養護教諭に毛布をかけてもらった場合には,「あたたかい」「安心感がある」の順に多く,養護教諭をしてみた感想では,「安心させたいと思った」「優しい気持ちになった」の順に多かった。養護教諭に毛布をかけられた後毛布の上からさすられた場合には,「安心感がある」「大事にされている」の順に多く,養護教諭役をしてみた感想では,「優しい気持ちになった」「安心させたいと思った」の順に多かった。

演習2では,子ども役が養護教諭役に背後からタッチングされたことについて,「びっくりした」「怖い」の順に多かった。養護教諭役をした感想については,「大切にしたいと思った」「安心させたいと思った」の順に多かった一方で, 相手の表情が見えないので顔を見てタッチングしたいという自由記述も目立った。養護教諭に前からかがんで触れられた時には,「安心感がある」「恥ずかしい」の順に多かった。

演習 3 では,養護教諭に背後から声かけされながらタッチングされた時には,声かけなしの時と比較して「安心感がある」と回答する人が多かった。また,養護教諭に前から視線を合わせて声かけされながらタッチングした場合には,「安心感がある」「大事にされている」「守られている」の順に多かった。養護教諭役をした感想では,「大切にしたいと思った」「安心させたいと思った」の順に多かった。

4)演習前後でのタッチングに対する意識の変化

演習前後でタッチングに対する考えの変化を比較すると,「タッチングは児童生徒とのコミュニケーションの一つであると思う」と「タッチングは声掛けをしながらすることが大切であると思う」の 2 つに 5%水準で有意差がみられた(図3, 図4)。

また,「養護教諭になったら積極的にタッチングをしたい」には 0.1%水準で有意差がみられた(図5)。

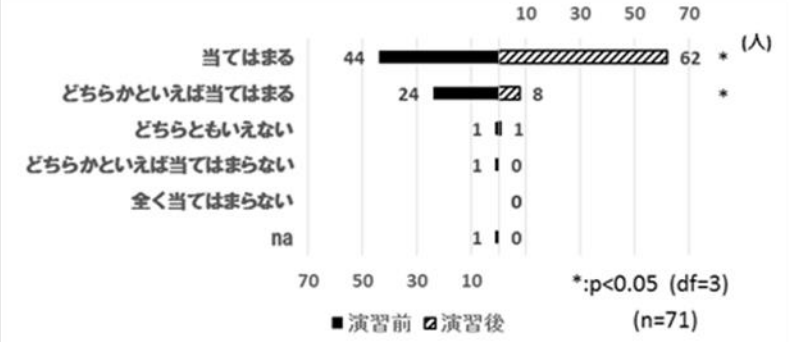

図３　タッチングは児童生徒とのコミュニケーションの一つであると思う(演習前後の比較)

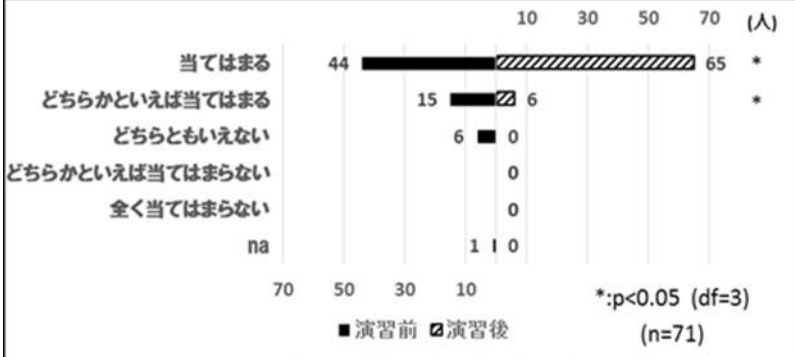

図４　タッチングは声掛けをしながらすることが大切であると思う(演習前後の比較)

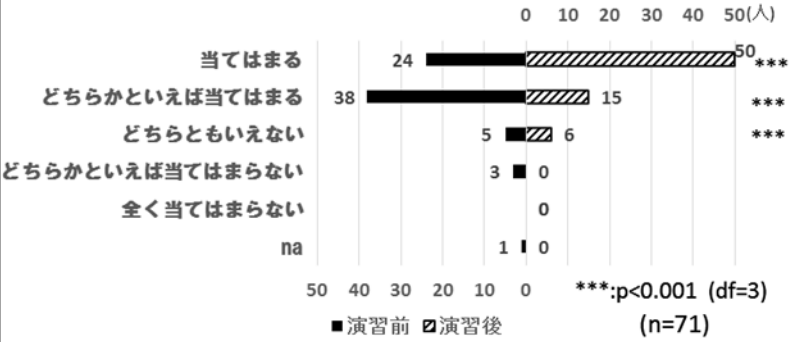

図５　養護教諭になったら積極的にタッチングをしたい(演習前後の比較)

考察

1.親からのスキンシップの実態からみえること

幼少期に保護者からどれくらいスキンシップを受けたか質問すると就学前と小学校低学年では約 9 割がよく触れられたと回答していたが,年齢が上がるにつれてスキンシップを受ける機会が減っていた。一方で保護者からのスキンシップの満足度は,どの年代においても満足していると回答する者が 7 割であった。このことから,身体的接触はなくても,心理的に繋がっていると感じている人が多いのではないかと推測される。そのため,養護教諭は発達段階に応じて配慮しながらタッチングをしていく必要があると考える。

2.養護教諭から受けたタッチングの実態からみえること

養護教諭からタッチングを受けた経験があるかどうか校種別に質問すると,小学校でタッチングを受けた経験があると回答した人が一番多く,中学・高校と年齢が上がるにつれてタッチングを受けた経験が減っていた。このことから,養護教諭が児童生徒にタッチングをする機会は,親が子どもの年齢が上がるにつれてスキンシップをしなくなることに比例して減っているということがわかった。

タッチングを受けた場面については,「内科的要因」「外科的要因」「健康相談活動」の 3 つに分類したところ,「内科的要因」でタッチングされた場面が最も多かったことから,養護教諭は児童生徒が体調不良を訴えたときやケガの手当ての際にタッチングをすることが多いことが明らかとなった。

また,タッチングを受けたことがあると回答した人すべてがタッチングと一緒に声掛けされたと回答していた。このことから,養護教諭がタッチングをする際には必ず声掛けを一緒にしていることがわかった。声掛けの内容は,「共感的タッチ」「教育的タッチ」「道具的タッチ」「処置的タッチ」に分類したところ,どの校種においても「共感的タッチ」をされたと回答する人が多かったことから,不安な気持ちやつらい気持ちで保健室に来室してきた児童生徒に対して触れながら声掛けをすることで,安心感を与えるなど心理面に働きかけるためにタッチングをしていると推測される。「教育的タッチ」についても全校種でされており,児童生徒を元気づけたり励ますことで,児童生徒が前向きに物事に取り組めるように声掛けとタッチングをしていると推測された。さらに,「教育的タッチ」の中には,性に関する知識を説明してもらったという回答もあり,タッチングとともに個別の保健指導を行っていることがわかった。「道具的タッチ」については,小学校と中学校ではみられたが,高校ではみられなかった。これは,養護診断をするために必要な情報を高校生は自分で養護教諭に伝えることができるが,小学生や中学生は自分の症状を的確に伝えることができないためであると推測される。処置的タッチは小学校ではみられなかったが,患部に手を当てたりさすることで痛みや苦痛を軽減させる役割があると推測される。

タッチングをされたときの気持ちについては,小学生では「安心できた」が最も多く,次いで「ほっとした」「気持ちが落ち着いた」の順に多かった。中学生では「安心できた」が最も多く,次いで「ほっとした」「気持ちが落ち着いた」と「保健室に来てよかった」の順に多かった。高校では「安心できた」が最も多く,次いで「気持ちが落ち着いた」「ほっとした」の順に多かった。どの校種においてもタッチングに対して肯定的なものが多く,養護教諭が行うタッチングは,児童生徒に安心感や幸福感を与えていることが推測される。

3.演習からみたタッチングの効果

演習 1 で毛布を使った感想をみてみると,子ども役が自分で毛布をかけた場合は「あたたかい」と回答した人が最も多い一方で「ほっとかれたような気持になる」と回答して人が次に多かった。養護教諭の感想を見てみると「あたたかいだろうなと思った」が最も多かったが,次いで多かったのは「なんとも思わない」である。また,養護教諭に毛布をかけてもらった場合には,「あたたかい」「安心感がある」の順に多く,養護教諭をしてみた感想では,「安心させたいと思った」「優しい気持ちになった」の順に多かった。養護教諭に毛布をかけられた後毛布の上からさすられた場合には,「安心感がある」「大事にされている」の順に多く,養護教諭役をしてみた感想では,「優しい気持ちになった」「安心させたいと思った」の順に多かった。これらのことから,養護教諭が毛布をかけてあげることによって,子どもは安心感を感じることができ,さらに養護教諭が毛布の上からさすることで,大事にされていると感じさせることができることから,自己肯定感を高めることに繋がると推測される。今後養護教諭の職務を行ううえで,ただ毛布をかけてあげるのではなく,児童生徒の心身の両面を支援するきっかけになる事を念頭に置いて対応していく必要がある。

演習 2 では,養護教諭から背後からタッチングされたことについて,「びっくりした」「怖い」と回答している人が多く,視界の外からタッチングすることは,児童生徒に不安感を与えることがわかる。養護教諭役をした感想についても,相手の表情が見えないので顔を見てタッチングしたいと回答する人もいたので,養護教諭がタッチングをする際には,子どもの視界から見える位置でタッチングする必要があることがわかった。養護教諭に前からかがんで触れられた時には,「安心感がある」と回答した人が最も多い一方で「恥ずかしい」の回答が次に多かった。このことから,タッチングをする際には,子どもを見つめすぎないなど視線に気をつけてタッチングする必要があると考える。

演習 3 では,養護教諭に背後から声かけされながらタッチングされた時には,声かけなしの時と比較して「安心感がある」と回答する人が多かった。このことから,タッチングと声掛けを一緒にすることが重要であると推測される。また,養護教諭に前から視線を合わせて声かけされながらタッチングした場合には,「安心感がある」と共に「大事にされている」「守られている」と回答している人が多かったことから,視線と声掛けに気をつけてタッチングすることが養護教諭のタッチングにおいて,最も有効な方法であることがわかった。養護教諭役をした感想では,「大切にしたいと思った」「安心させたいと思った」が上位であることから,視線を合わせたり声かけして丁寧に対応することで,子どもを大切に思う気持ちが生まれると推測される。

4.演習前後でのタッチングに対する意識の変化からみえること

演習前後でタッチングに対する考えの変化を比較すると,「タッチングは児童生徒とのコミュニケーションの一つであると思う」と「タッチングは声掛けをしながらすることが大切であると思う」の 2 つに 5%水準で有意差がみられた。また,「養護教諭になったら積極的にタッチングをしたい」には 0.1%水準で有意差がみられた。これらのことから,演習を通して学生自身がタッチングの大切さを見つめなおすきっかけとなったことがわかり,タッチングに関する演習は養護教諭を目指す学生に必要であると感じた。しかしながら,タッチングに関する演習を受けたことがある養護教諭は 6 割しかいない[1)]という結果があることから,タッチング教育にも力を注ぐ必要があると考える。

まとめ

研究によって，声掛けや目線,立ち位置に気を付けて行うタッチングは,児童生徒に安心感を与え,信頼関係を高めるとともに,体を通した心への支援にも繋がっていることが捉えられた。これらのことから,養護教諭自身がタッチングの大切さを理解し,児童生徒が心から安心できるタッチングを実践していくべきである。

注

1)澤村文香・三木とみ子・大沼久美子他.2013.「養護教諭によるタッチングの実態と実感している効果の検討―質問紙調査の結果から―」『学校保健研究』55(1),3-12.
2)藤野彰子.2000.「終末期がん看護における意図的タッチングによる痛みの緩和」『教育学研究室紀要<教育とジェンダー>研究』3, 39-52.
3)山口創・山本晴義・春木豊.2000.「両親から受けた身体的接触と心理的不適応との関連」『健康心理学研究』13(2), 19-28.
4)浜崎隆司・森野美央・田口雅徳.2008.「幼少期における父母のスキンシップと養育態度の関連」『幼年教育研究年報』30, 23-31.
5)大沼久美子・三木とみ子・力丸真智子・永井大樹.2007.「健康相談活動における毛布活用の有効性―養護教諭の「毛布(タオルケット)に包まれる経験」から―」『日本健康相談活動学会誌』2(1), 27-37.